

興道寺廃寺 と 興道寺遺跡

～古代若狭のテラとムラ～

The record of the Kohdohji-ancient temple



美浜町・美浜町教育委員会

はじめに

興道寺廃寺は、耳川左岸の段丘上に7世紀の終わり頃に建立された古代寺院の遺跡です。この時代、国の仏教政策により列島各地に爆発的に古代寺院が建立されました。興道寺廃寺は耳川流域を本拠とした豪族が建立した寺院と考えられます。

これまでの調査で金堂跡・塔跡の基壇(基礎部分)の一部が確認され、東西に塔、金堂が並び立っていた様子が明らかとなりました。福井県下で古代寺院の伽藍配置を窺える数少ない事例です。また、周辺の律令集落、興道寺遺跡を含めて、今後の調査、保存活用を進める上で大変重要な遺跡群と言えます。

興道寺廃寺や興道寺遺跡の調査を振り返りながら、耳川流域、さらには若狭地方における古代寺院や周辺集落のあり方の一端、興道寺廃寺が建立された背景などについて考えてみたいと思います。

興道寺廃寺
発掘調査の風景

目次

興道寺廃寺・興道寺遺跡の立地と周辺の環境	1・2
過去の調査	3
興道寺廃寺の寺域と伽藍域	3～5
興道寺廃寺の金堂跡	6～8
興道寺廃寺の塔跡	8・9
興道寺廃寺の軒瓦	9～12
興道寺遺跡	12・13
興道寺廃寺をめぐる	14

興道寺廃寺・興道寺遺跡の立地と周辺環境

興道寺廃寺・興道寺遺跡は、福井県三方郡美浜町興道寺に所在します。美浜平野を北進して若狭湾に流れる耳川左岸の河岸段丘の微高地に位置し、興道寺廃寺を取り囲むように広く興道寺遺跡が分布します。古代北陸道若狭支路、東側に流れる耳川を抑える水陸路の要衝、若狭東部の要地に寺院が建立されました。

興道寺廃寺が建立された背景を考える上で、興道寺廃寺建立前夜の6世紀代(古墳時代後期)の周辺遺跡の動向を見てみます。

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡は耳川左岸の河岸段丘に大きく展開する集落遺跡です。

興道寺遺跡では、後に興道寺廃寺が建立された微高地で6世紀終わり頃の竪穴住居址や掘立柱建物跡などが確認されています。興道寺遺跡の北方、藤ノ木遺跡では6世紀初め頃の竪穴住居址が確認されています。興道寺遺跡、藤ノ木遺跡の竪穴住居址からは製塩土器が出土するなど、集落居住集団の土器製塩(土器を用いた塩作り)への関与が推測されます。

松原遺跡、早瀬遺跡、興道寺窯は6、7世紀の代表的な生産遺跡です。

松原遺跡は耳川河口部の浜堤に所在し、6世紀初め頃の土製模造品が出土、また7世紀中頃の石敷製塩炉や多くの製塩土器が確認されています。早瀬遺跡は若狭湾を望む海岸段丘に所在し、6世紀代の石敷製塩炉が確認されました。興道寺窯は雲谷山から派生する支尾根の西斜面に所在し、灰原から6世紀前半の須恵器、円筒埴輪などが、窯床面から7世紀前後の須恵器が出土しています。

古墳(群)には獅子塚古墳、興道寺古墳群などがあります。

獅子塚古墳は藤ノ木遺跡に近接して所在する全長32.5mの前方後円墳で、墳丘には円筒埴輪を配し、墳丘の周囲には周溝を巡らせ、埋葬施設に北部九州系の横穴式石室を持ちます。6世紀初め頃の須恵器、鍛冶関連遺物、玉類、鉄製武具、鉄製工具など豊富な副葬遺物を備えます。耳川流域の小首長墳と考えられ、若狭耳別の祖、室毘古王(『古事記』)をその被葬者に充てる説もあります。興道寺古墳群は獅子塚古墳の南方、興道寺遺跡の西方に分布する10数基からなる古墳群です。獅子塚古墳とともに1古墳群を形成し、6世紀代の流域小首長墳の系譜にあります。

遺跡の動向から見れば、獅子塚古墳、興道寺古墳群の被葬者集団は藤ノ木遺跡や興道寺遺跡などの集落を拠点とし、松原遺跡土製模造品に見るように海上儀礼(祭祀)を行い、興道寺窯や松原遺跡・早瀬遺跡に見るように須恵器や土器製塩といった手工業生産を行ったものと考えられます。6世紀の段階に、既に耳川流域を治めた小首長(地域豪族)が存在し、後に興道寺廃寺が建立される素地が養われていたと言えそうです。

●興道寺廃寺を上空から望む

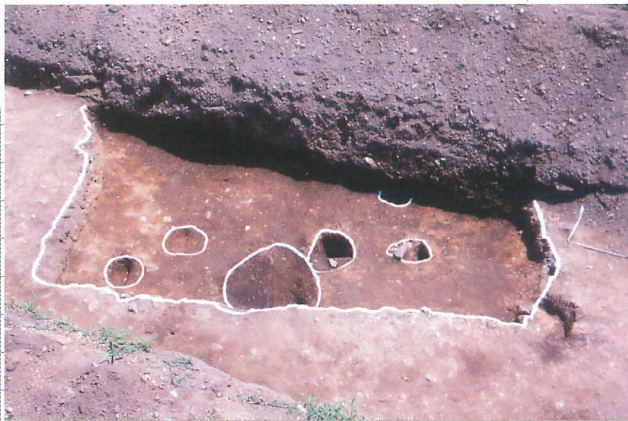


●興道寺廃寺を東から望む





●興道寺廃寺周辺の遺跡分布(縮尺1/50,000)



●興道寺遺跡竪穴住居址



●興道寺遺跡竪穴住居址製塩土器出土状況



●藤ノ木遺跡竪穴住居址



●興道寺古墳群周溝内須恵器出土状況

過去の調査

興道寺廃寺は、大正時代、県農事試験場（県園芸試験場）建設の際に布目痕が残る多量の瓦片が出土したことで注目されました。その後、1958（昭和33）年に興道寺小字中ノ丁から軒丸瓦がほぼ完形で出土し、付近に観音という小字名が現存することから、郷土史家を中心に「観音畑廃寺」と呼ばれ、早くから古代寺院の存在が知られていました。

1977（昭和52）年、興道寺小字中ノ丁付近において周辺の土地改良事業に伴う福井県教育委員会の試掘調査が行われました。この時、軒瓦を含む多量の瓦片が出土し、基壇の一部と思われる地面の高まりが確認されたとのことで寺院遺構が残存する可能性が指摘されました。

興道寺廃寺や周辺律令集落における本格的な調査は、平成以後の開発事業の増加を契機として行われています。1997（平成9）年以後、興道寺廃寺北～西方、興道寺遺跡北縁部において美浜町教育委員会などによる発掘調査が進められ、これらの開発事業が興道寺廃寺まで及ぶ可能性が危惧されました。このことから、2002（平成14）年以降、美浜町教育委員会が興道寺廃寺の範囲や内容を確認するための調査を継続的に進めているところです。

興道寺廃寺の調査は、2006（平成18）年3月現在、第7次調査を終えています。



●県園芸試験場跡地



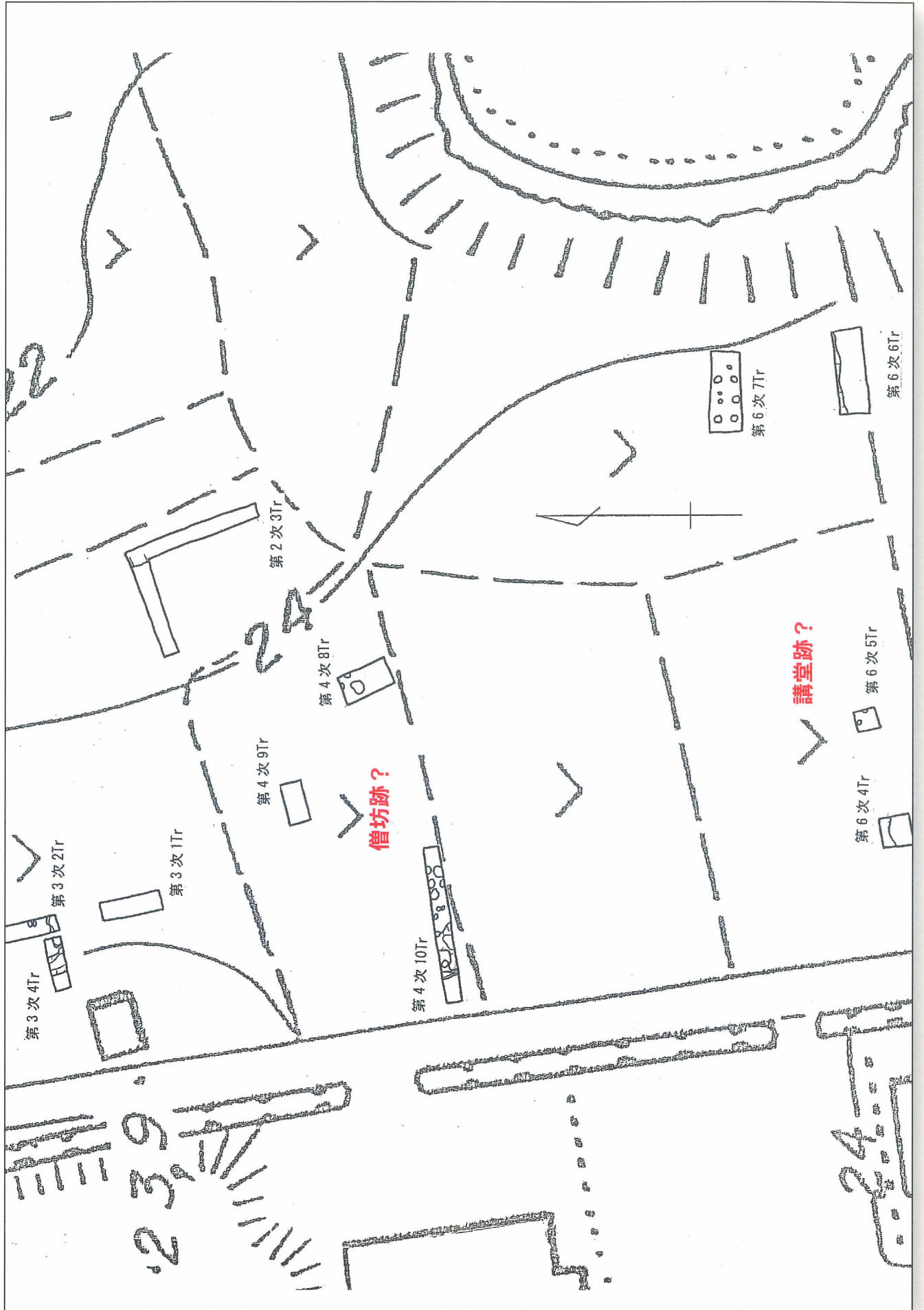
●興道寺廃寺現況

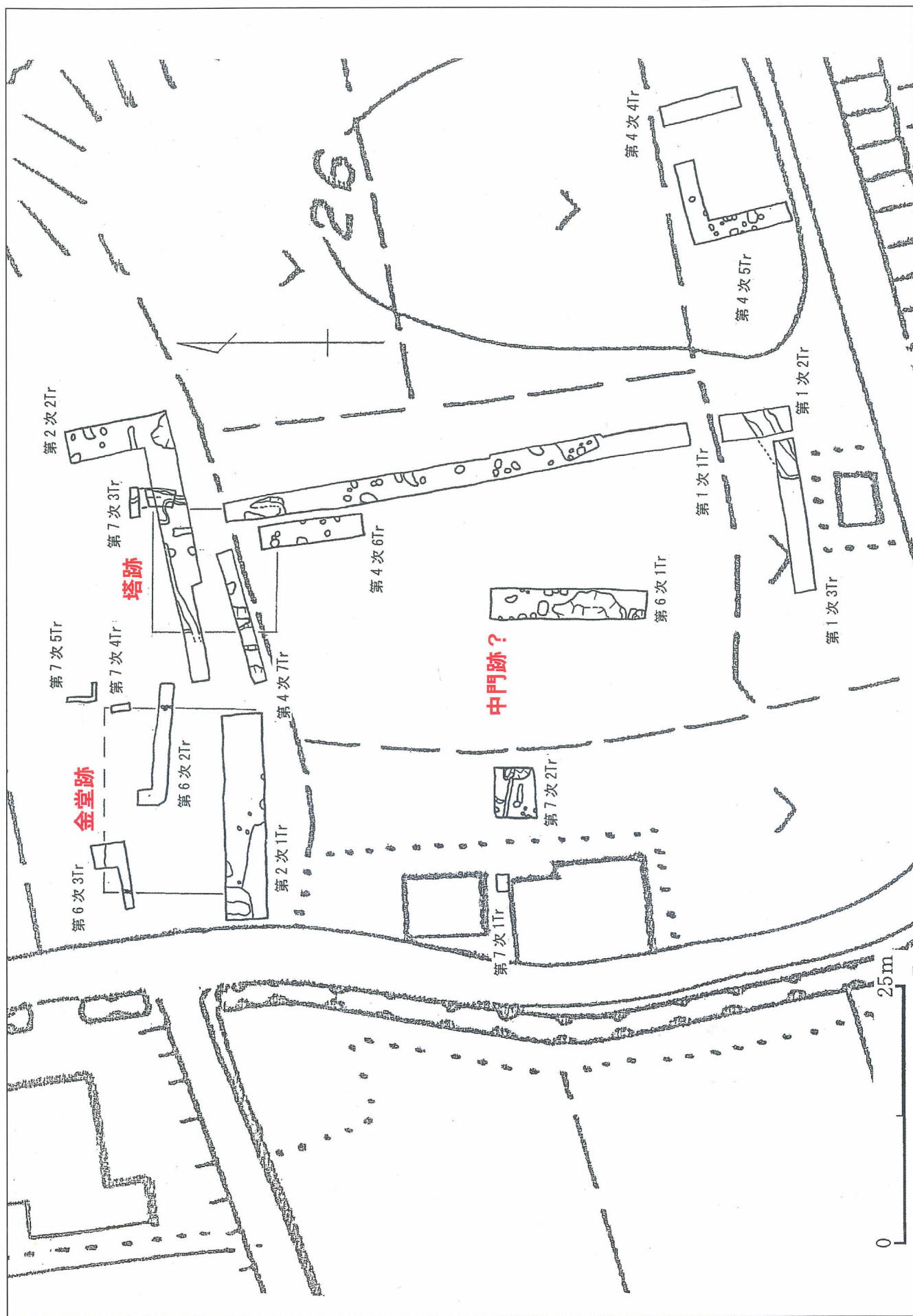
興道寺廃寺の寺域と伽藍域

興道寺廃寺の伽藍地（僧侶が宗教活動を行う空間）には数軒の民家が建っていますが、現況は基本的には畑地です。現在の地形をよく観察すると、微起伏が認められ、土地の高まりを残す部分に金堂（本尊仏を安置する仏堂）や塔（仏舎利を納める）などの基壇が存在する可能性が指摘されてきました。

調査の結果、現段階では塔と金堂が東西に並ぶものと考えられ、この南側に中門（寺院に開く門）、北側には講堂（仏法を講じる堂）が存在する可能性が高まっています。しかし、これまでの調査で中門、講堂、回廊（伽藍を取り囲む廊下状施設）は確認されていません。

寺域については、現在の畑地が展開する部分の大半を占めるものと考えられます。伽藍地の北方には8世紀の遺構、遺物が広く分布し、僧坊（僧侶が居住する建物）や雑舎群が存在する可能性があります。





●興道寺廃寺調査平面図(縮尺1/500)

興道寺廃寺の金堂跡

金堂の基壇(建物の基礎部分)の規模は、東西17.8m、南北推定14.8m、唐尺に換算してそれぞれ60尺、50尺です。基壇の南半は現在の地形が示すように近年に大きく削られており、また調査の結果から基壇の北辺についても削られているようです。

基壇が削られずに残る部分に版築(大型建物の重量に耐える基礎を造る技法)の痕跡を確認することができます。標高23.2~23.4mまで地面を掘り込み、標高24.0mまで黒褐色土と黒褐色砂礫土を厚く積み、さらに24.1mまで数cm単位で黄褐色土と黒褐色土を互層に叩き締めています。基壇東西辺の瓦溜まり下面の標高が23.6mであることから、元の地面から20~40cmほど基壇部分を掘り込み、地業(土壌改良工事)を行っています。

基壇の東西辺では自然石を南北に列石状に置き並べる外装が見られます。ただし、扁行唐草文軒平瓦が東西辺ともにこの自然石下に挟まっていることから、後に少なくとも基壇の東西辺の改修が行われたものと考えられます。

礎石が遺存しないため建物の規模、構造ははっきりしませんが、飛鳥・白鳳時代の金堂に一般的な桁行3間、梁行2間の身舎の四面に廂が付く建物を復元し、南面する(南を正面とする)建物であるとすれば、柱間3.0m(10尺)を考えることができます。ただし、金堂基壇がさらに南側に広がり、東面する金堂であった可能性も残されています。今後の確認調査が必要です。

基壇の東西辺からは軒瓦を含む多量の瓦が出土しています。上位には細片化した瓦が堆積し、下位には遺存状況が良い瓦が密に堆積します。特に基壇東辺では軒瓦が大半を占め、完形品に近い瓦が密に散乱する状況が確認されました。寺院廃絶の頃の姿を表すものと考えられます。

●金堂跡基壇西辺



●金堂跡基壇東辺



●金堂跡基壇北辺



●金堂跡基壇西辺瓦溜り



●金堂跡基壇東辺瓦溜り



●金堂跡基壇西辺列石



●金堂跡基壇東辺列石



●金堂跡基壇東辺



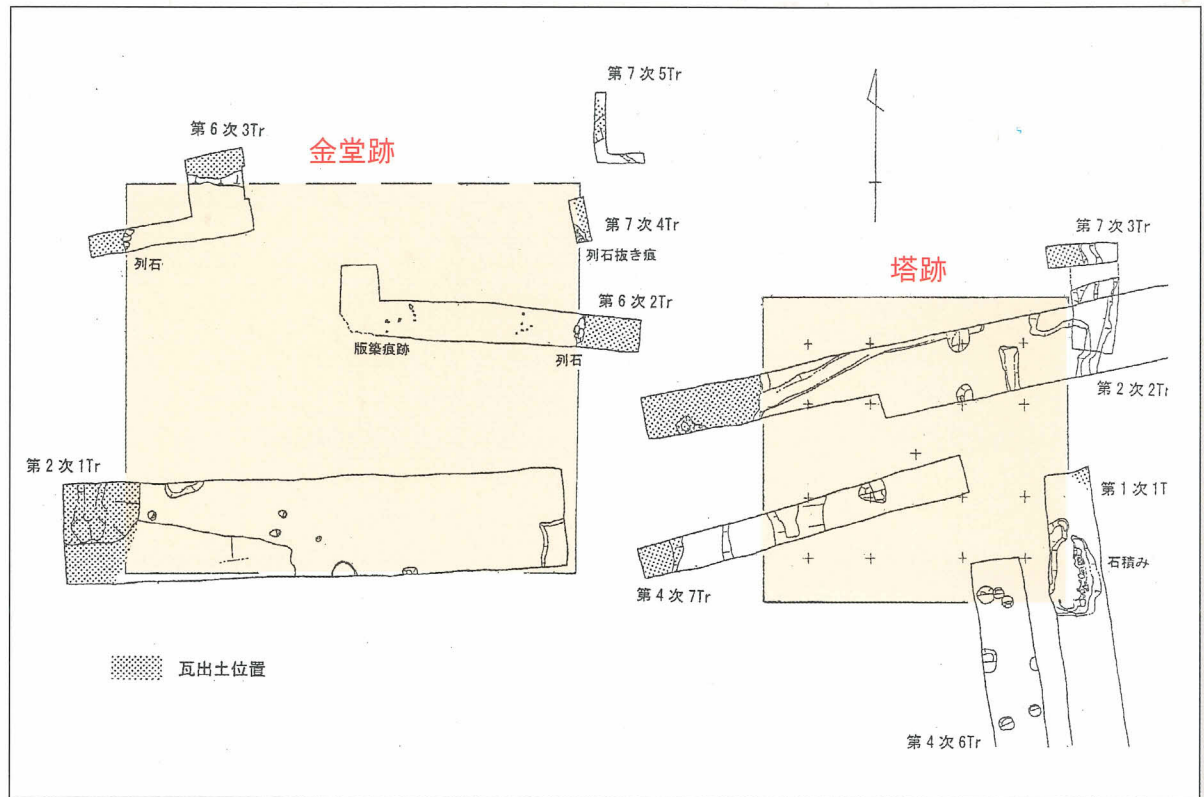
●金堂跡基壇東辺瓦溜り



●金堂跡基壇版築



●金堂跡基壇西辺



●金堂跡・塔跡基壇平面図(縮尺1/300)

興道寺廢寺の塔跡

塔の基壇の規模は、方^{ほう}12m、唐尺に換算して40尺四方となります。基壇の西辺は西に向かって標高が低くなる元の地面を意図的に削平することで南北方向に比較的安定した垂直面を造ります。一方、基壇の東側(東辺、南東・北東隅部)は幅0.5~0.8mの溝^{くっさく}を掘削することで基壇内外を区画しています。溝は深さ0.2mまで残存し、南東隅部付近、溝内側の立ち上がり^{れき}りに30cmまでの礫を積む様子を確認していますが、その積み方は雑然としています。

礎石は遺存しませんが、底に根固^{ねがため}として拳大の礫を密に備える0.6~1.0m前後の規模、深さ0.2~0.35mの土坑群を礎石掘り方^{ほかたすあと}(据え痕)と考えることができます。方^{けん}3間、中央間を広く取り3.6m(12尺)、両脇間2.4m(8尺)となる塔初層規模が想定されます。

基壇西辺から軒瓦を含む多量の瓦が出土し、東辺付近においても一定量の瓦が出土しています。細片化した瓦堆積の下位に遺存状況の良い瓦が密に分布する状況は金堂基壇東西辺と同様です。



●塔跡基壇西辺

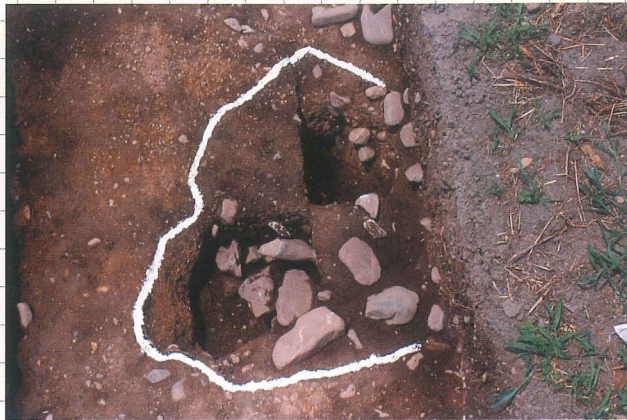


●塔跡基壇西辺瓦溜り

●塔跡基壇南東隅



●塔跡基壇礎石掘り方



●塔跡基壇西辺瓦溜り



●塔跡基壇西辺瓦溜り



●塔跡基壇北東隅



興道寺廢寺の軒瓦

一連の調査で瓦、須恵器、土師器、製塩土器、鉄釘、鉄滓などが出土していますが、遺物の大半を占めるものは数千点にも及ぶ瓦です。軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、隅落とし平瓦、丸瓦、平瓦が出土しています。

興道寺廢寺から出土した軒瓦は、文様の特徴などから3つのタイプに分けることができます。

軒瓦Ⅰ類は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦との組み合わせです。一般に山田寺式と言われる軒瓦です。

軒丸瓦は、瓦当径20cm前後、瓦当を厚く作り、1 + 5の蓮子を配する小さな中房と8葉の蓮弁を持ちます。外縁は二重圈文を巡らせ、内側に段を持つ直立縁を作ります。丸瓦を未加工のまま瓦当側面と接合させますが、その先端が瓦当先端近くまで達します。軒平瓦は、瓦当厚4cm内外、弧文は型押しで厚く平坦に作り、凸面に1単位4枚の花弁を型押しで連続して配する文様が伴います。

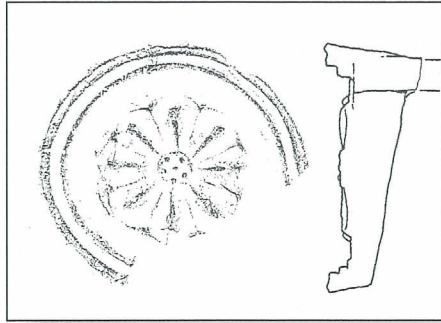
これらの軒瓦は、興道寺廢寺創建時に伴うものと考えられ、その年代は7世紀終わり頃と思われる。出土量はさほど多くなく、過去の表採資料を合わせると金堂基壇の南側に分布する傾向があります。

軒瓦Ⅱ類は、素弁十葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦がセットとなります。軒丸瓦は、瓦当径17cm前後、瓦当は比較的薄く作り、鋭い蓮子を1 + 8に配する中房と、10葉の蓮弁を持ちます。瓦当外縁は無文の直立縁で、瓦当外縁の剥離痕から考えて瓦当上部に丸瓦広端をかぶせて接合することで瓦当上半の外縁としたものと思われる。軒平瓦は、瓦当厚3cm前後、Ⅰ類と比べて弧文断面が丸みを帯びます。

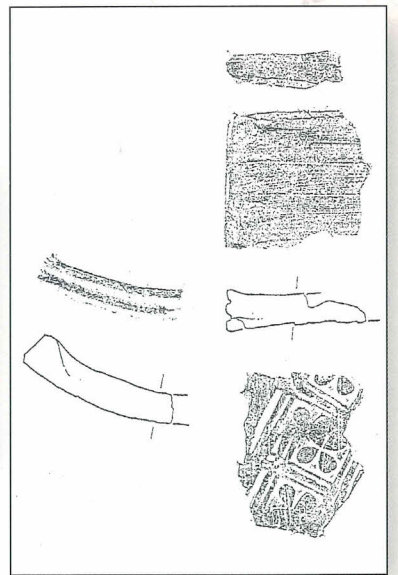
●軒丸瓦 I 類



●軒丸瓦 I 類拓影(縮尺 1/6)



●軒平瓦 I 類拓影(縮尺 1/6)



●軒平瓦 I 類



●軒平瓦 I 類凸面花文



軒丸瓦には木製範の消耗により蓮弁の厚さが極端に薄くなるものや、^{はんもくめ} 範木目が明瞭に浮き出るのが散見できるように特徴的な^{はんきず} 範傷を持ちます。

興道寺廢寺では中心を占める出土量で、比較的長期間、興道寺廢寺に供給された瓦と考えられます。軒瓦 I 類の後の時期、7 世紀末～8 世紀初め頃に供給され、興道寺廢寺の伽藍整備時に^{おお} 尾根を覆ったものと考えられます。

軒瓦 III 類は、^{だんあご} 素弁九葉蓮華文軒丸瓦と段顎の扁行唐草文軒平瓦とが組み合わせます。

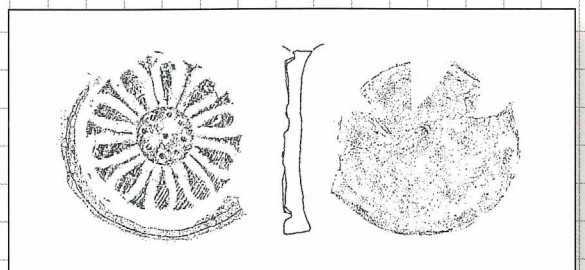
軒丸瓦は、瓦当厚を厚く作り、蓮子を 1 + 5 に配する中房と、9 葉の蓮弁を持ちます。外区内縁に^{しゅもん} 珠文を配し、外縁内斜面には^{せんきよ しもん} 線鋸歯文が巡ります。丸瓦先端を未加工のまま瓦当外区の裏面に当てて接合します。軒平瓦は、瓦当厚 5 cm 前後、瓦当上外区に珠文を配し、凸面は瓦当面から 7～8 cm で段顎となります。軒平瓦は、金堂基壇東西辺の瓦溜まりの下層から集中的に出土しています。

軒瓦 III 類については^{きゅうと} 宮都に用いられた軒瓦からの^{けいふ} 系譜が考えられ、8 世紀以後の年代が考えられます。

●軒丸瓦 II 類



●軒丸瓦 II 類拓影(縮尺 1/6)



●軒平瓦 II 類拓影(縮尺 1/6)

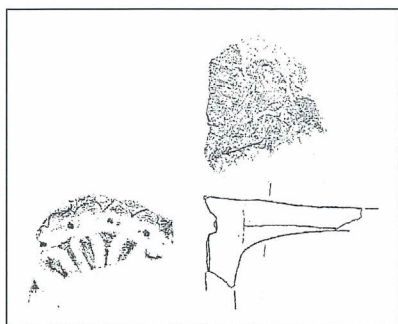
●軒平瓦 II 類



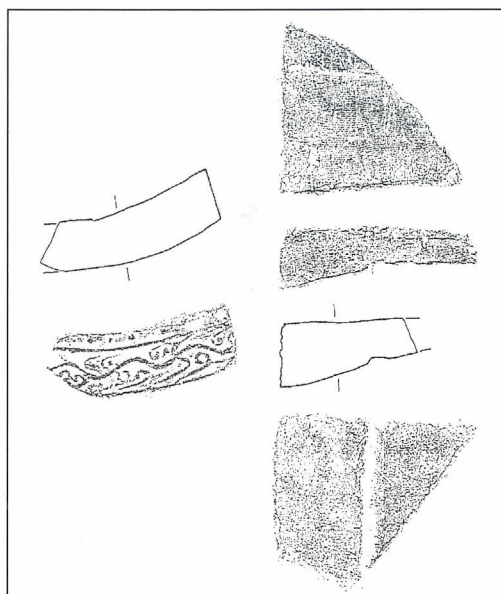
●軒丸瓦 III 類



●軒丸瓦 III 類拓影(縮尺 1/6)



●軒平瓦 III 類拓影(縮尺 1/6)



●軒平瓦 III 類



興道寺廃寺に葺かれた瓦の生産地(瓦窯)はまだ発見されていません。

ただし、古墳時代後期の興道寺窯が所在する支尾根の東側斜面において古代の須恵器、瓦がわずかに分布する地点(高善庵遺跡)が確認されています。昭和初期にこの地から出土したことを墨書する瓦が現在に伝わるなど、付近に瓦の窯場が存在する可能性もあります。2003(平成15)年に美浜町教育委員会が部分的な試掘調査を行いました。瓦窯を確認することはできませんでした。

●高善庵遺跡近景



●高善庵遺跡から興道寺廃寺を望む



興道寺遺跡

興道寺遺跡は福井県三方郡美浜町興道寺に所在し、現在の興道寺地籍の大半を含む大規模な遺跡です。弥生時代後期、古墳時代中後期、律令期、中世の時期にまたがりますが、中心となるのは興道寺廃寺の時代です。

興道寺遺跡では、開発事業に伴い興道寺廃寺周辺での発掘調査、試掘調査が継続的に行われています。興道寺廃寺北～北西方にて8世紀前半の竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡4棟などが確認されています。

興道寺遺跡の建物群を見ると、竪穴建物と掘立柱建物が対となって2～3棟からなる小群を構成するようで、建物方位は磁北を意識し、寺院施設方位とほぼ合致することから寺院と北方集落との同時性が窺えます。また、竪穴建物の構造から、平面が正方形を示し、方位が磁北からわずかに西偏、3.3～5.0mの規模を持ち、壁面に沿って柱穴を配し、貼床(硬化面)、造り付けかまど、製塩土器片が混じる土坑を持ち、建物埋土から一定の製塩土器片が出土する一群と、崩れた方形プランを示し、2m前後の規模を持ち、柱穴、かまどなどの遺構を持たず、床面の起伏が激しい一群とに大別されます。前者から後者への建替えが行われたものと思われます。

出土遺物には、8世紀前半代の須恵器杯・杯蓋・高杯・甕・壺、土師器杯・皿・盤・甕、製塩土器などの土器や、丸瓦・平瓦、あるいは鞆羽口、鉄釘、鉄滓、紡錘車といった小鍛冶に関連する遺物が出土しています。

興道寺廃寺の北方、律令集落の様子を見ると竪穴建物、廃棄土坑(ゴミ捨て穴)などから須恵器・土師器の食膳具(食器類)や製塩土器が多く出土し、畿内産(系)土師器と称される、外面に磨き、内面には暗文と言われる模様を施した精製された土師器の食膳具が一定量存在します。

興道寺廃寺周辺の律令集落は興道寺廃寺と連動した消長しょうちようを示しています。興道寺廃寺に伴う集落、つまり興道寺廃寺の雑舎群と考えることもできます。しかし、遺跡を特徴付ける多くの畿内産(系)土師器や製塩土器の出土から考えて、郡家ぐんけ(郡の役所)に関連する工房集落こうぼうであった可能性も残されています。興道寺廃寺近郊に官衙関連施設、つまり三方郡家が存在した可能性も捨てきれません。

●興道寺遺跡土井ノ上1区竪穴建物1



●興道寺遺跡土井ノ上1区竪穴建物2



●興道寺遺跡中ノ丁1区竪穴建物1



●興道寺遺跡中ノ丁1区竪穴建物1かまど



●中ノ丁1区竪穴建物1かまど遺物出土状況



●興道寺遺跡焼土抗



●興道寺遺跡出土須恵器杯・杯蓋



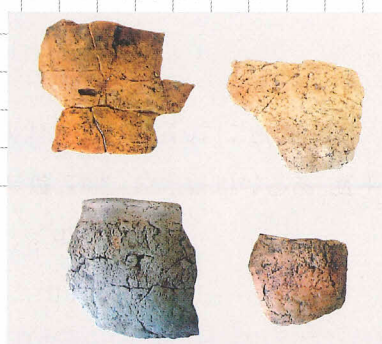
●興道寺遺跡出土須恵器鉢



●興道寺遺跡出土土師器杯



●興道寺遺跡出土製塩土器



興道寺廃寺をめぐる

幻の古代寺院と言われて久しい興道寺廃寺がついにベールを脱ぎ始めました。

興道寺廃寺では、東に塔跡、西に金堂跡が配される伽藍配置が復元されます。南側に中門、北側には講堂が存在するものと考えれば、現段階では「法起寺式」、あるいは「観世音寺式」の伽藍配置を想定されます。福井県下では若狭国分寺跡(小浜市)に次いで伽藍配置が復元される古代寺院として注目されます。

興道寺廃寺が建立された時代は、出土した軒瓦の年代から7世紀の終わり頃と考えられます。その背景には天武・持統天皇の仏教政策が関係するものと推測されます。8世紀前後には伽藍の整備に至り、8世紀以後、金堂基壇の改修を経て、興道寺廃寺北方集落の消長から考えて9世紀以後、廃絶したものと思われまゝ。興道寺廃寺を建立した人達は、6世紀代の耳川流域の小首長(豪族)の後裔が考えられます。

古代三方郡では、臥龍院(若狭町)境内において古代に遡る丸瓦・平瓦の出土が知られています。臥龍院南方には、「郡厨・郡・津」などと書かれた墨書須恵器が出土し、三方郡家に関連する遺跡として考えられている城縄手遺跡や、官衙色豊かな遺物が出土し、旧三方湖周辺に点在する角谷遺跡、田名遺跡などが所在するように、古代三方郡には耳川流域だけでなく、三方湖周辺(旧三方町)にも寺院の建立を可能とした有力豪族が存在したようです。

興道寺廃寺の発掘調査を契機として、歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る ～古代若狭のテラとムラ～」が2006(平成18)年2月11・12日の2日間にわたり開催されました。美浜町内に在住する方々はもとより、美浜町外からも多くの歴史愛好者などがシンポジウムに参加されました。

シンポジウムでは、興道寺廃寺が若狭地方で最古級の古代寺院であったことや、伽藍配置が分かる福井県内では数少ない事例となること、また今後、調査が進み、伽藍域や寺域が確定すれば、史跡指定としての価値も高まることなどが確認されました。さらには、興道寺廃寺や周辺遺跡の動向から考えて、三方郡家が耳川流域にあったのではという新説まで示されました。このシンポジウムを契機に、また新たな謎も生まれてきました。

興道寺廃寺は、先人の努力によって幸いにも大きな開発事業が及ぶことなく、地中にその姿を残したまま今日まで伝えられてきました。1,300年以上の時を隔てて、ようやく長い眠りから覚めようとしています。

興道寺廃寺をめぐる今後の調査、保存活用に対しまして、美浜町の皆様、そして美浜町内外の歴史を愛好する皆様方の暖かいご支援、ご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。

埋蔵文化財周知パンフレット 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラ～

2006(平成18)年3月31日 発行

発行 美浜町・美浜町教育委員会
福井県三方郡美浜町郷土25-25
印刷 若越印刷株式会社
福井県敦賀市道口63-10-1

●歴史シンポジウムの様子



この電子書籍は、2006年3月31日、美浜町教育委員会が発行した『埋蔵文化財周知パンフレット 興道寺廃寺と興道寺遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：埋蔵文化財周知パンフレット 興道寺廃寺と興道寺遺跡

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日